

### 13. 肝広範壊死後の癥痕肝において $^{99m}\text{Tc}$ -GSA と $^{99m}\text{Tc}$ -Sn コロイドの解離が見られた一例

山室 正樹 志賀 哲 伊藤 和夫  
 塚本江利子 中駄 邦博 加藤千恵次  
 鐘ヶ江香久子 望月 孝史 玉木 長良  
 (北大・核)  
 泉山 康 (同・三内)

症例は癥痕肝と診断された22歳男性。肝機能軽度異常。CT, MRIにて肝内線維化組織を疑う索状構造を認めた。 $^{99m}\text{Tc}$ -GSAではHH15, LHL15は正常で、SPECT像では、上記索状構造にはほぼ一致した集積欠損を示した。これら所見は他の臨床所見とよく一致した。一方、 $^{99m}\text{Tc}$ -Snコロイドは、肝硬変様の所見を示し、SPECT像でも索状構造は明らかではなかった。病理の結果、索状構造は線維化組織で、他部位は正常肝組織であることが示唆された。線維化組織における網内系細胞の存在が両スキャン所見の解離の原因と考えられる。GSAは、癥痕肝における肝機能と正常肝細胞分布の評価に有用と考えられた。

### 14. 急性心筋虚血発作時の $^{99m}\text{Tc}$ -ピロリン酸/ $^{201}\text{Tl}$ 同時 SPECT 検査

伊藤 和夫 玉木 長良 (北大・核)  
 松村 尚哉 菅原 智子 山下 武廣  
 清水 紀宏 (函館中央病院・循内)  
 斎藤 猛美 板摺 秀幸 東 康一  
 田中 雄二 (同・放部)

急性心筋梗塞が疑われ、緊急入院した21症例を対象に  $^{99m}\text{Tc}$ -PyP/ $^{201}\text{Tl}$  二核種同時 SPECT 検査を施行し、その臨床的意義に関して検討した。その結果、 $^{99m}\text{Tc}$ -PyP 心筋集積は心筋梗塞を欠く一過性の高度虚血時にも観察され、壊死心筋細胞の存在を示唆する結果が得られた。一方、PTCA 例の検討では  $^{99m}\text{Tc}$ -PyP の集積はその後の心筋壁運動の指標とはならず、 $^{201}\text{Tl}$  の心筋集積の状況が心筋壁運動の評価に有用であることが示された。 $^{99m}\text{Tc}$ -PyP/ $^{201}\text{Tl}$  二核種同時 SPECT 検査は壊死心筋の存在と壁運動の予後を同時に評価できる方法として、AMI 症例の早期検査法として有用である。

### 15. $^{201}\text{Tl}$ 心筋 SPECT 検査における吸収、散乱線補正の効果

木下 俊文 飯田 秀博 成田雄一郎  
 柏倉 明美 庄司 安明 菅原 重喜  
 奥寺 利男 上村 和夫 (秋田脳研・放)  
 田村 芳一 (同・内)

$^{201}\text{Tl}$  心筋 SPECT 像では体内での  $\gamma$  線の吸収の影響で後下壁がみかけ上低下してみえる。今回、トランスミッションスキャンで得られた吸収係数のデータを用いて、散乱線補正と吸収係数マップによる吸収補正を行った SPECT 像と従来の SPECT 像を比較した結果、健常男性7名(平均22.7歳)において、吸収、散乱線補正により下壁の有意なカウントの上昇がみられた。冠動脈造影で狭窄病変がなく、心筋シンチで下壁の欠損を示し、吸収、散乱線補正を行っても取りこみの低い症例が経験された。 $^{201}\text{Tl}$  心筋 SPECT 検査で、吸収、散乱線補正を行うことで、後下壁の血流の評価の信頼性が向上すると考えられる。

### 16. $^{99m}\text{Tc}$ -HSA-D lymph-scintigraphy を用いたリンパ浮腫の定量評価の試み

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 塚本江利子  
 加藤千恵次 中駄 邦博 望月 孝史  
 玉木 長良 (北大・核)  
 山本 有平 杉原 平樹 (同・形成)

乳癌術後の高度の2次性リンパ浮腫のため micro-lymphatico venous implantation (MLVI) がなされた女性3例に対し、Lymphscintigraphy によるリンパ浮腫の定量評価を試みた。前腕と上腕に24時間後に分布する量(Ascent. Index)は術後の臨床経過をよく反映していた。術前の24時間後の投与部位への薬剤残存(Absorption Index)は、亢進、遅延共に認められ、局所の分布の比率(Distribution Index)と共にその臨床的意味に関しては今後症例を増して検討する必要がある。